

『今昔物語集』卷五の構成について

福 澤 真 希

『今昔物語集』卷五は「天竺付仏前」という編目を持ち、釈迦の出生以前の天竺を舞台にした説話を載せている。卷一から卷四までは、釈迦の兜率天から人間世界へ生まれ変わる話を始まりとして、以降ずっと時間的進行に随って各巻が編集されてきたが、天竺部の最後である卷五になって突然時間を遡り、卷一以前の時代の話が語られている。このことだけを見ても、卷五は卷一から卷四までとは性格を異にしているという印象を持つ。卷五に集められた各説話についても、仏教色の見られない説話や動物のみが登場する説話など、これまでになかった形の説話が多いため、卷五を卷一〜卷四に対してどのような巻であると考えべきなのか、諸先学によって様々に論じられてきた。例えば国東文麿氏は震旦本朝の卷九及び卷十九・二十に対応する仏教教訓の巻であるとし、池上洵一氏は世俗説話の巻、小峯和明氏は卷十・卷二十一〜三十一に対応する王法の巻であるとそれぞれ論じている。卷五で問題にされるのは、多くが以上のような巻一〜四に対する卷五の位置づけについてであるが、一方で卷五について、全説話の配置に、撰者のどのような考えが反映されているのかということについて言及されたことはなかった。撰者の意図に基づいた考察がなされたことはなかった。先行研究の中に卷五の構成について論じたものはなく、わずか

に、全説話を内容別に分類した池上氏の分類があるのみである。池上氏は巻五全体を天竺の世俗の巻であると考え、さらに全体を二つのテーマに分けて一〜六までを天竺史、七〜三十二までを世俗諸譚であると考え、全説話を次のように分類した⁽¹⁾。

1〜6 王・后 7〜12 本生(国王を含む) 13〜29 動物(本生を含む) 30〜32 雑

池上氏の説は、一〜六の王・後の内容を持つ話で天竺史を表現し、七〜三十二については、それぞれのテーマに添った(雑に関してはテーマの統一のない)世俗の話と並べて巻五が形成されたということであろうか。全体の分け方、説話群の内容は概ね納得できるものの、三十〜三十二の意味付けが「雑」とされていることで、撰者の意図が読み取れない点に問題があるように思われる。また池上氏の考えによれば世俗の巻であるのに、なぜ釈迦の前世物語であり、仏教説話である「本生」が構成に組み込まれたのかが明らかになっていないことも不満に思われる。そこで一見雑多に思われる説話構成にも、撰者による何らかの意図が全話に亘って反映されていると思われることから、改めて各説話の配列の意味を考えてみたい。

ここでは巻五の説話配置を細かく検証することで、撰者が巻五を構成するにあたって、どのようなことを考えていたのか、そして何を表現しようとしたのかを明らかにしていきたい。巻五は構成上四つの説話群に分けることができる。一つ目は一〜六から成る、仏教のまだ浸透していない天竺において、人々の役に立った四つの方法について語る説話群で、以下「仏教を除いた天竺」と呼ぶ。二つ目は七〜十二から成る、釈迦の人間だった頃の前世の話を集めた説話群で、以下「釈迦の前世譚」と呼ぶ。三つ目は十三〜二十五までを一区切りとして、動物の素晴らしさ、人間の愚かさ、仏教の威力の三つを複合的に語る説話群であると考えた。以下「人間と仏教」と呼ぶ。四つ目は二十六〜三十二から成り、以上の三つの説話群を通して、最終的に天竺において人々が頼りにした三つのものを

語り、仏が生まれるべき環境が整った状態となったことを示す説話群で、以下「仏の出世に適した世界」と呼ぶことにする。

一 仏教を除いた天竺

一〜六は仏教の浸透していない天竺で、人々が何を頼りにして生活していたのかを語ろうとする説話群である。内容上、一・二、三、四・五、六の四つに分かれている。一は僧迦羅が軍兵を率いて羅刹国に攻め込み、羅刹たちを討伐した手柄によって国王となった話である。二は師子と姫との間に生まれた人間の男の子が、父の師子を殺した褒美によって国王となった話である。一と二は武力によって王になった人物が出てくる点が共通する。

三は王の持つ「夜光る玉」を盗んだ人が、以前盗みに入った僧房で聞き知った知識によって王の策略をかわし、ついには玉を王に返す代わりに半国を領有することになった話である。三には「盗ヲ仕ル事無カラマシカバ、其ノ時ニ被謀レテ辛キ目ヲゾ見マシ、今日大臣ニ成テ、半国ノ王トハ成ザラマシ。此レ偏ニ盗ノ徳也」(四〇一頁)という盗人の言葉があり、この話の中で「盗み」は罪として戒められず、一・二で主人公が行使した武力と同じように、身を助けるものとして肯定的に捉えられている。また最後に次のような結語がある。

然レバ、悪シキ事ト善キ事トハ、差別有ル事無。只同ジ事也。智リ無キ者ノ、善悪異也トハ弁ル也。彼ノ央幅魔羅ハ仏ノ指ヲ不切ズハ、忽ニ道ヲ可成キニ非ズ。阿闍世王父ヲ不殺ズハ、何デカ生死ヲ可免キ。盗人玉ヲ不盗ズハ、大臣ノ位ニ昇ラムヤ。此ヲ以テ善悪一ツ也ト可知シトナム語り伝ヘタルトヤ。(四〇一〜四〇二頁)

この文章は「善も悪も同じ」であるということを伝えようとするもので、悪人が仏教によって救われる話に強い

関心を見せる撰者の興味を引く内容であると考えられ、恐らく巻のテーマというよりも『今昔物語集』全体に込められた一つのテーマであろうと思われるが、この話の中にこの結語を用意した理由は、「この話では（本来悪い行いである）盗みを肯定的に扱う」という姿勢を示すためであると考えられる。天竺では盗みも身を助ける立派な方法であったと撰者は考えたのであろう。

四は強力な神通力を持つ一角仙人が、雨を降らす竜王たちを瓶に閉じ込めたので、天竺は旱魃になった。王たちの遣わした美女に誘惑された仙人は、美女の身体に触れ神通力を失う。竜王たちは瓶を破って雨を降らせ、神通力を失った仙人は人々の笑い物になったという話である。五は雌鹿が仙人の衣の洗い汁などを舐めて、人間の女の子を生み、女の子は仙人によって育てられる。女の子は成長すると、歩いた足跡に自然に蓮華が生じ、その蓮華を見た王に見初められ後となり、一つの蓮華を生む。蓮華からは五百人の美しい皇子が生まれ、出家して辟支仏になったという話である。

四では多くの竜王を一人で捕えてしまう強力な神通力を持つ仙人が描かれ、仙人の力の存在とそれが並はずれて強力であることを物語っている。また一方で、女の身体に触れることで神通力がたやすく失われてしまうという、仙人の脆さをも描き出している。仏法の方が優れていると撰者が考えているため、仙人の力は強力ではあるが欠陥もあるという話を選んだのだろう。そのように仙人の力の脆さに撰者が注目したと考えると、次の五も同じ趣旨の話であると考えられる。五にも仙人が登場するが、一角仙人と異なり全く力を見せていない。五の中で目立っているのは雌鹿から生まれた女と、蓮華から生まれ辟支仏になった皇子たちである。五には女の父親である南の岳に住む仙人と北の岳に住む仙人の、二人の仙人が出てくるが、女がつい火を絶やしてしまったために、言いつけられて北の岳に住む仙人に火を貰いに行く場面がある。そこで女が歩いた跡に蓮華が自然に生じることを知って北の岳の

仙人は驚き、仙人の住処の周りに咲く蓮華を見た国王が喜んで「今日我此ニ来テ奇異ノ事ヲ見ル。善哉、。我大ニ歡喜ス」(四〇九頁)と誉めると、仙人は「此レ我ガ徳ニ非ズ」(四〇九頁)と言い、南の岳の仙人の娘の足跡に生じた蓮華であることを説明した。「我ガ徳ニ非ズ」という言葉は、この奇跡は仙人の力によって実現したものであることを示し、鹿から生まれた娘が仙人以上の徳を持っているということ、これもまた仙人の力の限界を示しているものと思われる。また娘の生んだ子は悟りを開いて辟支仏となっているので、彼らもまた仙人に勝っていると言える。この話で言われているのは仙人の力が仏法に劣ると言うことであろう。

六は般沙羅王の后が五百の卵を生んで、密かに箱に入れて河に流す。隣国の王が箱を拾って帰ると、数日後卵から全部で五百人の皇子が生まれたので、我が子として養育する。皇子たちは武勇に優れ、成長すると敵対していた般沙羅国の城を包囲した。后は皇子たちが我が子であることを知って皇子たち呼びかけ、後の母乳が自然に皇子たちの口に入るのを親子の証として説得し、両国は和睦を結んだという話である。この話で語られているのは、親子の絆の強さであると思われる。ただ皇子たちは敵国の后が母親であると思わないので、親孝行はしておらず、親孝行の話であるとは言えない。親子の絆が両国の友好に貢献したということ、天竺において親子の絆の強さは人々の役に立つもの、身を助けるものだと考えられたのであろう。

一―六は仏教が浸透していない天竺を描く説話群であると述べたが、一では観音、三では僧と経文、五では辟支仏のように所々に仏教的要素が出てくる。このことは仏教が浸透していないという前提に矛盾することであるが、撰者は卷五の冒頭で、釈迦が誕生する以前の天竺世界に仏教が存在しないことを言おうとしたわけではなく、仏法が浸透していなかったために仏法よりも身を助ける方法について言おうとしたのだと考えれば、仏教的要素は話を円滑に進めるためにのみ使われているのだと考えることができるだろう。

一の中に、僧迦羅が観音を念じて、やって来た馬に乗って危機を逃れる場面がある。ここについては仏法が身を助けたことになり、武力が身を助けた話だと言い切れないように思われる部分がある。しかしこの話の中心的話題は僧迦羅が羅刹を討伐して国王となることであると思われ、討伐の場面に仏法の助けはないので、最終的には武力が役に立ったと言う事が言われていると考えた。

この説話群で語られる、仏教の浸透していない天竺における人々の役に立つもの、自分の身を助けるもの、人々が幸せになるための条件とでも言うべきものは、武力、盗み、仙人の力、親子の絆の四つが代表的であると撰者は考えたようである。武力、盗み、仙人の力はそれを行使することで、親子の絆はそれが身に備わっていることで問題を解決し、幸せになることができるということである。一〜六には仏法が誉めたたえられる話はなく、七以降に仏法関連の話が置かれることから、最初に仏法を除いた天竺の原点とでも言うべき世界の様子を描くため、天竺の人々が仏教の浸透していない頃、どのような生活をしていたかを描き、後に仏法が盛んになることで人々の生活は素晴らしいものになったということを表現するために一〜六が置かれたのではないかと考えた。

二 釈迦の前世譚

七〜十二は釈迦の人間であった頃の前世の話を紹介し、仏教の素晴らしさを伝えようとする説話群である。内容は七・八、九・十、十一・十二の三つに分かれている。

七は両親と共に大臣から逃げる太子が、飢えの為母を殺して肉を食べようとする父を止め、母の代わりに自分の肉を両親に与える。また太子は、猛獣に化けた帝釈天に肉を食べられ、「捨て身の布施の功德によって仏になり、

一切衆生を救いたい」と誓うと、帝釈天が「布施の功德で仏になることはできない」と否定するが、太子は「自分の言葉が本当なら体が元通りになる」と誓うと、体は元に戻り以前より美しくなった。やがて大臣は王に討たれ、太子は国に戻って王位を継いだという話である。八は布施の大好きな大王が、隣国の雇った婆羅門に頭を乞われ、固い意志を以て頭を婆羅門に与えたという話である。

七と八は主人公である太子と大王が釈迦の前世であり、登場人物である大臣と婆羅門が提婆達多の前世であり、前世の釈迦が捨て身の布施をした点が共通する。七では蚊や蛇に肉を食べられた時、太子は「願ハ我レ来世二無上菩提ヲ得テ、汝等ガ餓ヘノ苦ビヲ済ハムト思フ」（四一五頁）と言い、また帝釈天に肉を食われている時に「願ハ我レ此ノ難捨キ身ヲ捨ル功德ヲ以テ、無上菩提ヲ成ジテ一切衆生ヲ度セムト思フ」（四一五頁）と言った。つまり太子はただ両親や虫、動物の現在の飢えを救うただけに自分の肉を与えたわけではなく、未来世に仏となって一切衆生を救うために布施を行ったということになっている。これは同じく布施を行う八の大王も、同じ動機によるものだということが言える。七と八は、釈迦は前世で、未来世に仏となって一切衆生を救うため、固い決意で捨て身の布施を行っていたことを語るために置かれている。七は母の身代わりとなって自分の身体を傷つけ肉を与えた主人公の親孝行なところと、一切衆生を救おうとする固い意志が本物であることが描かれるところが撰者の関心を引いたのではないかと思われる。八は相手が自分を邪魔に思う人物の仲間であっても、さらに神が主人公を守ろうとしても、意志を曲げずに頭を与えたところに釈迦の仏になろうという意志の強さが表れているために採用されたのである。

七にも八にも、巻一では釈迦に反抗する最悪の外道として描かれた、提婆達多の前世であるという人物が登場している。提婆達多は『今昔物語集』では救われていないが、恐らくこのような悪人も釈迦と昔から縁があったとい

うことで、救済者である釈迦の、救う相手を選ばないという性格を表現するために提婆達多の前世が釈迦の前世と出会う話が採用されたのだと考えられる。また提婆達多の前世に頭を与えたことも仏になるための過程であり、提婆達多のような人物が釈迦の成仏に貢献したことから、悪人も悪いだけの存在ではなく、救済者の力になることもあるということも言われているように思う。一方、巻一で最悪の外道として描かれた提婆達多が、最高の救済者である仏に出会う事が出来たのは、実は前世でも深く関わっていたからだとすることがこれらの話によって理解され、巻一の十を補足する役割をも持っていると言える。

九は転輪聖王が一切衆生を救うため仏法を知る婆羅門を召し寄せた。婆羅門は供養を受けず去ろうとしたので、教えを聞くため王は婆羅門の要求に随い、身体に千の傷を作りその傷に油と灯心を入れて燃やして供養したので婆羅門は半偈の文を説いた。実は帝釈天であった婆羅門に供養の目的を問われ、王は仏になる固い意志があることを打ち明け、それを証明したという話である。十は教えを求め王位を捨てて修行する国王が、法文を知る仙人に会い、教えを求めた。仙人は王が九十日間、一日五回針で身体を突かれたら教えると言ったので、王は了承し早速五十回突かれたが痛がらなかった。三日後仙人が痛いか、またやめるかどうかを尋ねると王は「地獄の苦しみを途中で逃れることはできない。その苦しみに比べれば何でもない」と言っただけで痛がりもせず九十日間耐え続けたので、仙人は八字の文を教えたという話である。

九と十は前世の釈迦が主人公であり、苦痛に耐えて教えを求める点が共通する。九では王が教えを求める理由について仏になるためだと明かす場面があるが、十では同じように教えを求めるものの理由は語られない。これも九と同じテーマであることから、恐らく九と同じく仏になって一切衆生を救うためであろうと考えられる。九の婆羅門は帝釈天であったが、十の仙人は前世の提婆達多で、ここでも釈迦の前世と関わり、八と同様に釈迦の修行の役

に立っていると云える。これらの話の中で七・八と同じく釈迦の前世は甚だしい苦痛を受けているが、九・十では捨て身の意味が七・八とは異なっている。七・八では苦痛を受ける行為自体が布施となり、人や虫や動物を助け、功德にもなっているが、九・十では苦痛を受けるのは教えを授かるためであり、無意味ではないが苦痛を受ける行為自体は誰かを助けていない。一切衆生を救える仏になることを目標に、まずは教えを授かるため、前世の釈迦は誰をも救わない苦痛を受けているのである。つまり七・八よりも九・十の方がより辛い行為であると考えて、撰者は捨て身の布施の後に教えを求めて苦痛を受ける話を置いたのではないかと思われる。

十一は五百人の商人と一人の沙弥が旅の途中、深山に迷い込み、のどが渇いて死にそうになったので、商人らは沙弥に助けを求めた。沙弥は修行不足であったが、商人たちのために諸仏に祈り、頭を大岩の先端にぶつけて出血させた。すると血が水に変わったので、商人たちは水を得て助かったという話である。十二は五百人の皇子が父王の行幸について行った時、比丘の弾く琴の音を聞いて、一斉に出家してしまった。驚く国王に大臣が、比丘の弾く琴の音が仏の教えを表現し、それに感化されて皇子らは世を厭い出家したのだと説明したという話である。

十一の沙弥と十二の比丘は釈迦の前世であり、十一の五百人の商人と十二の五百人の皇子は五百羅漢の前世であると語られている。十一は前世の釈迦が前世の五百羅漢を救った話であり、十二は前世の釈迦が前世の五百羅漢を仏道に導いた話であり、両話は救済から教育へと話題を発展させた構成になっている。釈迦が仏になるため前世で尋常ではない苦勞をした話の後に五百人を救い導いた話を置いたのは、時間的進行を意識した配置で、七・十までの前世での苦勞があって、十一の前世では五百人を救う奇跡を起こすことができ、十二の前世では五百人を仏道に導くことができたと言う事が言いたいのではないだろうか。それから釈迦の前世と関わるのが五百羅漢の前世であったことについては、釈迦と関係があり、且つ一度に登場する人数が多いのが五百羅漢であり、釈迦が前世でも多く

の人々を救ったという印象を与えるのに、都合のよい話であったためではないかと考えられる。

ここで一〜六の天竺の原点を語る説話群の後に七〜十二の釈迦の前世を語る説話群を置いた理由について考えた。一〜六で示された仏法の浸透していない天竺で、人々が幸せになるための条件（武力、盗み、仙人の力、親子の絆）は誰もが持っているものではなく、どれかの条件を満たす一部の人々しか幸せになることができなかった。前世の釈迦はそのことを不満に思ったために、仏法を求めて仏になり、人々を救おうとしたのであろうということが、一〜六、七〜十二、二十六〜三十二の説話群から読み取れる。七〜十二の中に前世の釈迦が描かれるが、前世の釈迦は「仏法の浸透していない世界では、武力や盗み、仙人の力や親子の絆を持たない人々が幸せになれないから、自分が仏になって人々を救いたい」と言っているわけではない。しかし、一〜六と二十六〜三十二を比べると、一〜六で人々が幸せになる原因となったものよりも、二十六〜三十二で人々が幸せになる原因となったものの方が優れたものとして、対照的に配置されていると言える。一〜六は二十六〜三十二に比べると未完成であり、そこに暮らす人々にとって不満の残る状態にある。七〜十二で突如として前世の釈迦が努力する姿が描かれ始めるのは、前世の釈迦が仏法を求め始めた理由を明確に書いていないとしても、一〜六に描かれた天竺世界の状態に不満を抱いているからであると考えるのが自然であろう。前世の釈迦は武力、盗み、仙人の力、親子の絆を持たない人々が幸せになれない世界に不満を持ったために、仏になって人々を救おうと考えたのだと思われる。「仏教を除いた天竺」で読み手に仏教のない状態の天竺の姿を見せ、「釈迦の前世譚」では前世の釈迦が天竺世界をより良くするために仏になる努力を始めることを表現していると考えられる。

また「釈迦の前世譚」の説話は、仏教における最高の救済者の前世での苦難と活躍を描くことで、仏教の素晴らしさ、ありがたさを強調し、これから天竺に浸透していく仏教への期待を高めるといふ役割をも持っていると言え

るだろう。前世の釈迦は身を捨てて布施することで人々を助けつつ功德を積み、仏になろうという強い意志を持ち、仏法を求めて要求される苦痛に耐えて、また前世の頃から人々を救い人々を導いていたということが、この説話群によって表現されている。

三 人間と仏教

前世の釈迦が人々を少しづつ救えるようになってくると、仏教が人々の間に浸透し始める。十三〜二十五の説話の中に仏法にまつわる話が描かれるようになるのは、「釈迦の前世譚」から時間が経過し、仏法が天竺に広まってきたからであると考えられる。十三〜二十五は動物の素晴らしさ、人間の愚かさ、仏教の威力の三つを複合的に扱い、最終的に仏教が人間に必要であるということを教えようとする説話群である。内容上、十三・十四、十五・十六、十七〜十九、二十・二十一、二十二・二十三、二十四・二十五の六つの説話グループに分かれている。

十三は菩薩の道を行う三匹の獣がいたが、獣たちの様子を見て誠の心を試すため、老人に変身した帝釈天がやって来て、自分を養うよう頼んだ。狐と猿は食物を用意して老人を養ったが兎は食物を手に入れられず、自分の身体を食物とするようにと言って焚き火に飛び込んで焼け死んだ。帝釈天は元の姿に戻り、兎が火に入った形を月の中に移しとどめたという話である。十四は獣の王である師子が、猿の夫婦から二匹の子を食糧集めの間預かった。師子がつい居眠りをすると驚が二匹の子猿を連れ去った。師子は目を覚まし、子猿たちを取り返すため驚と交渉し、子猿たちのため自分の股の肉を驚に与え返してもらった。師子は親猿たちに事情を説明し、感激する猿に「事の軽重に拘わらず、約束を破るのが恐ろしかったから助けたのである、それに私は獣に対する憐れみが深いのだ」と言っ

たという話である。

十三と十四は立派な心を持つ動物の行為について語られている点が共通する。十四では師子を釈迦の前世、親猿を迦葉と善護の前世、子猿を阿難と羅睺羅の前世であると説明しており、七と十二と同じ釈迦の前世を扱った説話であるが、内容は仏教について語られているわけではなく、七と十二とは異なる意図で配置されたものと考えられる。十四で憐れみ深い師子が釈迦の前世であったことを明かすことによって、釈迦の憐れみ深さを前世からのものであるとし、釈迦の偉大さを表現する目的もあつたであろうが、話の中で大事なものはむしろ、動物が人間にもなかなかできないような思いやりと誠実さを持っていたということであろう。

十五は国王の宮殿で火災が起こった時、人々が財宝を急いで運び出す中、護持僧である比丘が財宝の燃えるのを見て喜び、財宝を運び出すのを制止した。国王が不審に思って問い詰めると、比丘は「財宝が焼失したことによって、国王が三悪趣に墮ちる報いから免れたことを喜んだのです。わずかの財宝を貪るのは六趣に墮ちる原因です」と言つたので、国王は納得し、「今後は財宝を貪るまい」と言つて改心したという話である。十六は王宮を守る男が、果実好きの王にたまたま拾つた果実を献上すると、国王はその果実を常に献上するよう男に強要した。男が困つていと竜王が現れ、果実と引き換えに竜王に仏法を聞かせることを強要した。男の報告を聞いて、仏法を知らない国王が仏法を探させると、国の最高齢の老人の家に、古い時代から光を放つ柱があることがわかつた。柱を壊して中を見ると八斎戒の文があつたので、竜王は喜び、国に仏法が始まり、国が栄えたという話である。

十五と十六は貪欲な王が仏法によって救われる点が共通している。十三と十四では立派な動物が描かれたが、十五と十六では欲に耽る人間が描かれているので、この二つの説話グループは対照的に配置されていると言える。また貪欲な人間を救うのが仏教である点に注目される。十五では欲望に生きる人間の行く末が語られ、貪欲な生き方

が戒められている。ここでは人間が仏教に頼るべき理由の一つが出てきている。十六には欲望に対する戒めの言葉はなく、仏法の得難さが描かれている。貪欲で悪趣に墮ちてしまう人間を救うのが仏法であるが、仏法は得難いものなので、接する機会を得たら大切にしなければならぬということがこの説話グループの中で表現されている。

十七は毘沙門天から生まれた王がある時隣国に攻められ、兵数が隣国に劣るため苦戦を強いられていた。鼠墓の近くで野営していると、鼠の王に出会った。戦争に勝てるようにしてほしいと頼むと、鼠は王の夢で承諾を伝えた。国王が夜明けと同時に攻めよせると、鼠によって無力化された敵兵たちは全滅した。王は毎年鼠たちのために祭りを儲け、国を挙げて崇め国は平和で豊かになったという話である。十八は九色の体毛と白い角を持つ鹿が、人目を避けて山に暮らしていたが、ある日河で溺れている男を救出した。男は感謝し、鹿の住処を他言しないことを約束した。しばらくして九色の鹿捕獲の宣旨が下り、男は欲に目がくらんで王に申し出て鹿の居所を案内した。鹿の様子が普通ではないので王は鹿と話し合い、鹿は男の裏切りを嘆いた。王は鹿を殺してはならないという宣旨を下し、以来国は豊かになったという話である。十九は道心のある男が人に釣られた亀を助けたところ、数年後亀が恩返しに来て河の氾濫が近く起こることを伝えた。男は亀の忠告に随って船を用意したので助かり、船で河をこぎ行く途中、あの亀と、蛇と狐が流されてきたので救助した。人間の男が流されてきたのを助けようとすると亀が「人間は恩知らずだから放っておけ」と言ったが、結局助けた。数日後男は助けた蛇に出会い、莫大な財宝をもらう。その後助けた男が喜んで訪ねて来て、財宝を目にして財宝を半分要求した。断ると助けた男は怒って去り、国王に讒訴した。男は逮捕され責め苦を受けた。亀がやって来て、「だから人間は恩知らずだと言ったのに」といいながら、狐と蛇と三匹で策を練って男を牢獄から出させた。男の無実を知った王は男を放免して、讒訴した男を重罪に処した。男は亀の言葉が正しかったことを思い知ったという話である。

十七く十九は動物と人間との関わりと、動物の誠実さと人間の薄情さとの対比の二つが描かれている。十七では動物が人間を助けることがあるということ、十八では動物に助けられた人間が動物を裏切ること、十九では人間が助けた動物は人間に恩返しをするが、人間を助けても誠実さよりも欲が勝り恩返しをしないことがそれぞれ描かれ、動物の憐れみ深さと誠実さと人間の薄情さとが対照的に描かれている。十八には「然レバ、恩ヲ忘ル、ハ人ノ中ニ有リ。人ヲ助クルハ獸ノ中ニ有リ。此レ今モ昔モ有ル事也」(四四二頁)という結語があり、人の薄情さと動物の誠実さが強調されている。十八についてはこれもまた鹿が釈迦の前世ということになっているが、十四と同じく釈迦の偉大さの表現であり、釈迦の前世譚であったこと自体は配置した意図にあまり関わらないと思われる。十九では道心ある人が動物や人間を助けているので、一見人間の憐れみ深さが描かれているようであるが、話の中で亀が「獸ハ恩ヲ思ヒ知ル者也、人ハ恩ヲ不知ザル也」(四四四頁)、「人ハカク恩ヲ不知ザル也」(四四六頁)と二度にわたり人間の薄情さを訴え、最後に道心ある人が「亀ノ「人ハ恩ヲ不知ヌ者ゾ」ト云ヒシ、不違ハズ」(四四七頁)と思ひ知ったように道心ある人の憐れみ深さよりも人間の薄情さの方が強調されている。十七く十九で言われているのは、憐み深く誠実な動物に対する人間の薄情さ、欲深さであろう。人間は心かげについて動物に劣る存在であると言いたいため、この説話グループを必要としたのだと考えられる。十七く十九に動物の長点、人間に利益を与える点が描かれ、十八・十九に人間の欠点が描かれている。

二十は一匹の狐が古寺の比丘の読む経の「人でも動物でも、氣位を高く持てばその王となる」という文句を聞いて、氣位を高く持つことを実行した。狐の偉そうな態度に惑わされ、狐・犬・虎・熊・象に加え師子までが従者となり、狐の乗り物になったが、師子が習性によって咆哮すると狐は気絶し転落したので、師子や他の動物たちは獣の王だと思っていたのがただの狐であったことを知り、去って行ったという話である。二十一 は虎の威を借りて多

くの獸を脅していた狐が、虎に責められて逃げる途中、落とし穴に転落した。狐は穴が深くて脱出できず、世間の無常を観じて一念の菩提心を発した。すると大地が六種に震動し、六欲天が動き、文殊と帝釈天がやってきて狐に何を願ったのかを尋ねた。狐は文殊たちに穴から自分を引き揚げさせ、問いに答えず逃げようとしたが失敗したので、正直に白状した。文殊たちは狐が菩提心を発したことを誉め、狐は未来世に釈迦仏の世に生まれ、二つの名を持ち一切衆生に福を授ける菩薩になるだろうと予言したという話である。

二十と二十一は狐が主人公である点と、話の中で仏法の威力が発揮されている点が共通する。二十では経文の通りに氣位を高く持つと、一時的に獸の王となることができ、二十一では一念の菩提心を発したことによって、穴から脱出する機会を得て、死後生まれ変わって菩薩になることが保証された。二十と二十一は仏法に縋ることによって自分の境遇を良くすることができるということが言われている。二十は失敗談であるが、原因は経文の威力が発揮されなかったためではなく、結末に「然レバ象許ニ乗テ糸善カリツルヲ、師子ニ乗ルガ余リ事ニテ有ル也。人モ身ノ程ニ合テ、過ギタル事ハ可止シトナム語り伝ヘタルトヤ」（四五〇頁）とあるように、狐が調子に乗って師子を従者にしたのがやりすぎであったのである。象までは経文の威力で従者にすることができたのであるから、経文の威力は確実に発揮されていたと言える。ただし万能ではなく、限界があるということであろう。

二十二は東城国の皇子が西城国の皇女を妻にするため航海し、観音の助けによって西城国に着き、皇女に氣に入られ王にもてなされた。皇子は懷妊した皇女を残し祖国へ宝物を取りに帰った。皇女は双子の息子を生んだが皇子が帰らないので、三年後息子らと密かに夫を迎えに行くことにした。ところが皇女は道半ばにして重病にかかり、死んでしまった。一ヶ月後皇子がそこを通りかかり、乞食をする双子の素性を尋ね、我が子と知り、また妻の死を知って高僧を呼んで『大日経』の書写供養をさせ、父子は母の死んだ場所で命を捨てたという話である。二十三は

同じ大樹に住む千匹の猿がいたが、鼻のない多くの猿たちが鼻のある一匹の猿を馬鹿にしていた。猿たちは皆熱心に帝釈天を供養していたが、ある時帝釈天は鼻のない猿たちの供養の品を受け取らず、鼻のある猿の供養の品だけを受け取った。帝釈天はその理由を「前世の行いのせいで鼻がなく、鼻のある猿よりも果報が劣っているのに、それを知らずに麗しい物を馬鹿にしたから供養を受けなかったのだ」と説明した。鼻のない猿たちは反省して馬鹿にするのをやめたという話である。

二十二と二十三は帝釈天が登場する点が共通する。二十二の東城国の皇子は帝釈天の前世であり、二十三では帝釈天が猿に前世の果報を教えている。仏法を守護する帝釈天の前世と活躍を描き、仏教の世界には仏や仏弟子以外にも優れた救済者がいることを示している。また二十三では結語に「此ノ譬ヒヲ以テ懈怠・放逸ナル衆生ノ精進・持戒ノ人ヲ誹謗スルニ准ヘテ仏ノ説給フ也ケリ」（四五七頁）とあるように、鼻のない猿の態度は怠け者でわがまま勝手な衆生が努力して仏教道徳を守る人を馬鹿にすることを表現していて、帝釈天のような仏教をよく知る者に教えてもらわないと、人間は愚かなままだということも言われているようである。

二十四はひどい早魘が起こった時、干上がった池に住む亀がやってきた鶴に助けを求めると、鶴は気の毒に思つて亀を水場まで運ぶことにした。一本の木を亀と二羽の鶴が銜えて飛行することになったが、亀は初めて見る景色の美しさについて、鶴に口を開くと言われていたのにも拘わらず、鶴に話しかけてしまったので、亀は落下して死んでしまったという話である。二十五は夫の亀が、病気を持つ妊娠した妻の亀のために、猿を騙して海の中へ連れて行き、猿の肝を取って薬にしようとした。しかし亀が途中で事実を猿に話してしまったので、猿は「実は肝は海辺の木に懸けてある」と言つて亀を騙して陸へ戻り、木の上に逃げた。亀の企みは失敗し、お互いに罵り合った後、亀は海へ帰つたという話である。

二十四と二十五は亀が助かろう、あるいは身内を助けようとして計画を練っても、ここぞという時に自分から余計なおししゃべりをしたために失敗して台無しになるという様子が描かれている。二十四の結語には「此ニ依テ、物痛ク云ヒ習ヌル物ハ、身命ヲモ不顧ザル也。仏ノ「守口損意身犯」等ノ文ハ、此レヲ説給ナルベシ」（四五九頁）とあり、おしゃべりが仏教でも戒められていることが記されているが、二十五の結語では「昔モ獸ハカク墓無クゾ有ケル。人モ愚痴ナルハ此等ガ如シ。カクナム語り伝ヘタルトヤ」（四六一頁）とあり、ここでは動物の愚かさ、そして人間もこの動物のように愚かであるということが言われている。同じ亀の失敗をテーマにしていることから考えて、二十四もまた動物の愚かさ、人間の愚かさを示す話であると考えられる。

「人間と仏教」の説話群をまとめると、まず十三・十四で動物が思いやりと誠実さを持つ立派さを示し、十五・十六によって人間の欲深さと、仏法がそれを戒め救おうとするものであることを示し、十七・十九で動物は人を助け、恩を忘れないのに対し人間は欲深く不誠実であり、愚かであることを示している。二十・二十一で仏法が人間や動物にとって頼りになる存在であることを示し、二十二・二十三で仏教には仏がまだいない頃にも帝釈天のような優れた救済者がいることを示し、二十四・二十五によって動物は結局愚かであって、人間もまた愚かであるということを示している。十三・十四・十七・十九で人間の愚かさに対し、動物の心がけの立派さが強調されてきたが、二十四・二十五では一転して動物の愚かさが語られているのは、人間の愚かさを強調するために動物の立派さが語られる話が置かれたのであって、動物はそれ自体が救いの必要がないくらいに完全であるというわけではなく、やはり仏教からみれば愚かであるということを表現しているのである。十五・十六・二十二・二十三は人間や動物にとって仏法が頼りになる存在であることを示している。つまりこの説話群では、仏法こそが最も優れていて、動物の心がけが次に優れており、最もよくないのが人間の心がけであるということが言われていると考えられる。こ

こで撰者が言いたいののは、人間は欲深く不誠実で、思いのままに生きると動物よりも愚かで、結果として身を滅ぼすことになるため、仏法に頼る必要があるということであろう。「人間と仏教」は、仏法が天竺に広まる様子と、人間が仏法を必要とする理由を示す説話群であると言える。

四 仏の出世に適した世界

二十六〜三十二は一〜二十五の説話を通して、最終的に天竺において人々の為になった方法を示し、仏がこの世に出現するのに最適な環境が整えられたことを示す説話群である。内容上、二十六・二十七、二十八・二十九、三十・三十一、三十二の四つに分かれる。

二十六は盲目の母を養う子供の象が道に迷った人を助けてやったが、象に助けられた人は国王に、珍しい象がいるので捕らえるようにと進言した。王が象に助けられた人に案内されて行き、子供の象を捕らえると、象に助けられた人の両肘が折れて地に落ちた。捕えられた象が、養う者のいない母が餓えていることを思い何も口にしないで、それを知った王は象を哀れんで解放したという話である。二十七は深い山の奥を行く比丘が、象に無理やり山奥へと連れて行かれた。大きな象の前に降ろされて、比丘は死を覚悟したが、大きな象の様子から、その象の足に刺さった杭を抜かせようとしていることに気づき、杭を抜いてやった。象たちは喜び、最初の象は比丘に財宝を与えて比丘を元の場所に帰して去ったという話である。

二十七の最後に比丘が「早う大ナル象ハ此ノ象ノ祖也ケリ。祖ノ足ニ杖ヒ踏ミ貫タルヲ抜□ムトテ、比丘ヲバ将行タリケル也」(四六五頁)と考え、比丘を連れて行った象は杭の刺さった象の子であり、親を助けるため比丘を

連れて行ったのだということに気づいたと書かれている。二十六と二十七は親孝行な象が登場し、人間と一時的に関わりを持つ点が共通する。二十六には十八や十九に出てきたような恩知らずで欲深い人間が登場し、親孝行な象は実は釈迦の前世であったとされるが、両話に描かれているのは親孝行の素晴らしさであろう。親孝行であったために、二十六では捕えられた子供の象は解放され、二十七では大きな象が杭の苦痛から解放され、比丘も象の親孝行に貢献したため財宝を得たのだと言える。

二十八は天竺のある商人が五百人とともに航海していたところ、大きな魚の王に飲み込まれそうになった。舵取りの指示でそれぞれが仏の名と観音の名を唱えて助けを求めると、魚はすぐに海の中へ入り、皆無事に本国へ帰ることができた。魚は死後人に生まれて比丘となり、阿羅漢となったという話である。二十九はある浜辺に大魚が打ち寄せられ、五人の樵をはじめとして大勢の人々が魚の肉を食べた。その魚は後の釈迦仏で、樵に肉を与えようと考えていた。仏となった釈迦はその時肉を食べた五人を先に教化したという話である。

二十八と二十九は大魚が出てきて、人々が仏に救われ、魚の死後の姿が明らかになっている点が共通する。二十八では仏と観音の名を唱えた人々の命が助かったことから仏法の威力が描かれているが、その上人々に害を及ぼしかけた大魚自身も、はっきりと書かれてはいないが恐らく仏と観音の名を聞いたため、生まれ変わった後悟りを開くことができたということになっており、仏法の威力が強調されている。二十九では後に釈迦となる大魚が自分の身を犠牲にして肉を与えて人々を満足させただけでなく、さらに仏となった後は肉を最初に食べた人を優先的に救ったということで、これもまた仏教の救いの寛大さを伝えようとしている。二十八と二十九は仏法の素晴らしさを伝えようとする話であると言える。

三十は帝釈天が釈迦の出世以前に仙人のもとへ仏法を習いに通っていたが、ある時帝釈天の妻が夫の浮気を疑っ

て尾行した。帝釈天に見つかった妻は叱られて艶やかな声で夫に戯れかかると、その声を聞いた仙人は心が穢れて神通力を失い、凡夫となった。女は仙人の法にとって大きな妨げであるという話である。三十一はまだ仏が出現していなかった頃、ある牛飼いが飼っている牛のうち、群れから離れた一頭の跡をつけて行って、山の中に岩穴を見つけた。岩穴の中は天竺とは異なる美しい野原で、牛飼いは木から黄金の果実を一つ取って帰ろうとした。悪鬼が現れ果実を奪おうとしたのでつい飲み込むと牛飼いはたちどころに太って穴から出られなくなった。どうしても出られないので牛飼いは死に、その身体は人の形をした石になった。国王が牛飼いの食べた実の正体が仙人の薬であったことを知り、石を削り取って来るよう命じたが、どれだけ力を尽くしてもほんの少しも削り取ることができなかったという話である。

三十と三十一は仙人に関する話であり、また二十九では仙人が女性に心を動かされると容易く力を失うこと、三十では仙人の薬が強力すぎて人の自由を奪ったことなど、仙人の力の欠点を描かれる点が共通する。四・五と同様に撰者は仙人の力は仏法に劣るといことが言いたいようである。一方で仏のいない時代に、仙人は帝釈天に仏法を教え、仙人の薬は人にどうすることもできないほどに強力であり、仏がない時代には天竺の人々にとって強大な存在であったということも言われている。天竺の人々にとって仙人の力は仏法には劣るものの、仏のいない時代には頼りになる力であったことが表現されていると考えられる。

三十二はある国に七十歳を超えた老人を他の国に流すという決まりがあったが、親孝行な大臣は老いた母に孝養を尽くすため、地下室を造って密かに母を住まわせた。数年後、隣の国から王に難問が送られてきて、答えなければ国を攻め滅ぼすと言ってきた。国王が大臣に相談すると、大臣は一旦帰って老母に正解を聞いてから戻り、その通りにして隣国へ答えを送り返した。三度正解すると、隣の国はこの国の賢さに驚き、友好を申し出た。国王に問

われて、大臣は母に正解を教わっていたことを打ち明けた。国王は大臣の話聞いて、これまでの決まりを廃止し、老人を尊敬するように決め、流された老人たちを呼び戻す命令を下した。それから国は平和で人々は穏やかになり、豊かになったという話である。三十二も二十六・二十七同様に親孝行が人の為になるということが言われている。二十六・二十七では親孝行をしたのは動物であったが、三十二では人の親孝行ということで、またこの説話群の最初と最後に親孝行の話を置くために、離れた場所に置いたのであろう。親孝行の話をこの説話群に配された七話の中で三話も選んだことからして、撰者の親孝行への関心は仏法への関心と並ぶ程に高かったであろうと思われる。

「仏の出世に適した世界」の説話群をまとめると、二十六・二十七で親孝行が、二十八・二十九で仏法が、三十・三十一で仙人の力が、三十二で再び親孝行がそれぞれ、天竺における人々の為になる、人々の役に立つ方法として挙げられている。一〜六では武力、盗み、仙人の力、親子の絆の四つの方法が人々の役に立ち、また自分の身を助けるものであると言う事が言われていると指摘したが、二十六〜三十二では武力と盗みがなくなり、その代りに仏法が加えられている。恐らく仏法は巻冒頭の段階では天竺に広まっていないという設定であったために、仏法が加えられず、武力と盗みについては利己的であり他者を幸せにするかどうかという観点で言うとならば、仏法と並べるには及ばないと判断され、同じ天竺における人々の為になる方法を扱っている中で、最後に残らなかったであろう。親子の絆は仏法が登場すると親孝行というより良い形に発展したと言えるだろう。釈迦の出生以前の天竺は仏教が広まることによって人々の生き方が、武力や盗みに頼る利己的なものから、親孝行や仏法に励み他者の幸せをも望む形へと変わったということが表現されていると考えられる。そして親孝行、仙人の力、仏法の三つの要素が人々に行われ、大切にされることが、仏のいない世界の最も理想的な状態であり、天竺がそうように変化することによって、今はまだ仏がいながまもなく仏が出現するべき世界として完成したのだと言う事が考えられる。仏のまだ出

現していなかった天竺世界には「仙人の力」が、幸せになるための方法として使われていたが、巻一から巻四に描かれる天竺世界に「仙人の力」が使われている場面は見られない。恐らく、仙人の力は仏のいない時代にのみ必要とされたのだということを撰者は考えたのであろう。また現実にはまだ仏がいないが仏の出現が間近となる世界には、仙人の力が存在するものであると言う事も言えるだろう。

巻五は仏のいない時代であり、『今昔物語集』成立当時も、仏のいない時代である。仙人が存在する時期について撰者が考えたであろうことをここで考察してみたい。天竺部の時代設定から考えて、仏の存在の有無を中心的要素として、仏教的な世界の変化が定期的に訪れているものと思われる。具体的には①過去に仏教が存在したが今は仏教が広まっていない時代、②仏教が広まった時代、③仏が出現する時代、④仏の死後の千年間の時代、⑤仏法はあるが仏法が廢れていく時代、⑥仏法が滅ぶ時代の六段階の変化が起こり、⑥の次にまた①の時代に戻ると思われる。なおこの六段階は天竺部、末法に関する資料をもとに論者がここで仮に考えたもので、撰者の考え及び仏教世界の常識を示すものではない。

天竺部では右の①～④が描かれており、①と②は巻五、③は巻一～三、④は巻四、天竺部にはないが、『今昔物語集』成立当時は⑤に当たり、⑥はまだやってきていないがいずれやってくる時代であると考えられる。仙人は①の時代に出現し、②の時代の終わりとともに絶滅するものと考えられる。③～⑥に仙人は存在しないと思われる。仏のいない時代という点で①・②と『今昔物語集』成立当時の⑤は同じであるが、仏教が一度滅ぶという過程を経ているので、⑤は①・②とは異なる時代であり、仙人はいないと言っているのである。なお、⑥の仏法が滅ぶ時代は天竺部には描かれませんが、仏教の世界で言う「末法」の時代の後に教えが完全に滅びる「法滅」を迎えると言われているので、教えが完全に滅びる時代がいずれ来ることを『今昔物語集』撰者も知っていた可能性はある。⁵⁾⑥の後

①に戻るのとは過去仏の存在が天竺部の各所にみられたことから、過去仏の時代から釈迦出現の時代までずっと①⑤⑥を繰り返してきたと撰者が考えたのではないかと思われるからである。巻五には釈迦が出現する時代が他の仏の時代とは異なる展開を見せていたとはどこにも書かれておらず、仏教の世界では仏が出現する状況、期間は決まっていると考えて巻五を編集したのではないかと思われる。撰者は恐らく、仙人の力が『今昔物語集』成立当時に存在しないことの理由を説明しようとしたのだと考えられる。

以上、巻五を構成する四つの説話群について考察してきたが、ここで撰者がどのようなことを考えて、何を表現するために巻五を構成したのかということについて考えてみたい。撰者は、釈迦という仏がこの世に出る前、天竺世界がどのようなようになって、どのようにして仏が出現する世界へと変化したのか、言い換えれば、仏が世に出現するために必要な環境とは何かということを描こうとしたのではないかと思われる。仏が人間世界に現れると言うのは並大抵のことではなく、仏が現れる手順としては、世界に仏法が浸透しておらず、人々が武力と盗みと仙人の法と親子の絆によってのみ幸せになることができたという時代に、仏法を習得して仏になろうと生まれ変わる度に努力し続ける者が現れる。すると自然に仏法が広まり、仏法と親孝行と仙人の法が人々に大切にされるようになる、仏が人間世界に現れるのだと言う事を、撰者は巻五で表現したのだと考えられる。「人間と仏教」で仏教の必要性が示されたのは、人間は仏教が人間たちにとって必要である理由を自ら理解して、自然に仏教を大切にするようになったと言う事を表現しているのではないかと思われる。

歴史的事実としての仏教の創始者である釈迦が生まれる前の天竺に、仏教があると言うのは矛盾するようではあるが、『今昔物語集』でも仏教の世界でも、釈迦が仏教を作り出したということにはなっていない。釈迦は前世で

仏教を習得して大変に長い間努力して、仏になったのである。天竺部で前世の釈迦が仏教の会得に苦勞していたことから、また釈迦以前の仏の時代の話などから窺えるように、仏教は釈迦が生まれる前から存在していたと言える。巻五に設定された時代は釈迦の誕生以前であるから、時間的な構成を一貫させて、巻一にこの構成を採用するのが自然ではあるが、「天竺」が仏の出現するべき世界になる過程」を最初の巻で表現しようとすると、天竺がどのような世界であるのか、また仏がどのような存在であるのかを知らない読み手は全く理解できず、天竺部五巻を読むことへの意欲が失われる可能性がある。そのためまず巻一〜三で仏がどのような存在であるのかを教えようとし、巻四で仏の死後の世界の変化を描き、巻五で仏出世以前の話に戻り、仏が出現する世界はどのようなものであったのかを語ろうとしたのではないかと考えられる。

巻五の構成を見て、特徴的であると思われることは、「仏教を除いた天竺」と「仏の出世に適した世界」との対比と、「人間と仏教」で仏教が人間に必要な理由を語ろうとしたことではないかと思われる。対比は時代の変化を表わしていて、巻四の前半と後半の対比と同じであり、巻五独自の工夫ではないが、一方で仏教が人間に必要な理由を、説話配置によって表現しようとしたのは巻五にしか見られない工夫であると言える。巻五について、仏教の広まっていけない天竺が、仏を目指す人が現れ、仏教が広まり、やがて仏が出現するのに適した環境を備えるに至るまでの過程を描こうとしたのだとすれば、十三〜二十五の説話群で描くべきことは、仏教が人々に受け入れられ、大切にされていくようになる様子である。仏教を必要とする理由がわかる構成になっていれば変化があって読みごたえは出てくるだろうが、目的から考えれば仏教が人間になぜ必要なのかを強いて書く必要はないと思われる。そのため、巻五編集の目的に直接関わらないように見える十三〜二十五の説話からは、撰者の人間の持つ性質に対する強い思いを見ることができると言える。撰者は十三〜二十五の説話のうち、人間の薄情さや欲深さを物語る話を読

み、人間が仏教を必要とする理由を『今昔物語集』の中で主張したかったのではないかと考えられる。人間は心かけの点で動物にさえ劣るため、ありのままに生きると破滅してしまう。そこで仏法に頼り、教えを学んだり信仰したりする必要があったと言っているのが、撰者が考えた理由であると思われる。撰者は人間を本質的に愚かな存在であると考え、愚かであるために仏教によって救われなければならないと考えたようである。

撰者の考えたことを推測する上で、もう一つ触れておきたい点がある。それはなぜ仏のいない天竺で人々が幸せになるための条件が「武力」と「盗み」と「仙人の力」と「親子の絆」であり、まだ仏がいないが、まもなく仏が出現する世界で人々に必要にされるのが「親孝行」と「仙人の力」と「仏法」であったのかということである。

「武力」や「盗み」の代わりに「知力」や「財力」や「人間的魅力」が、「親子の絆」の他に「親子以外の人間関係」などは候補に挙がらなかったのだらうかと疑問に思われるが、「親子の絆」は後の「親孝行」へと発展し、「親孝行」は撰者の好む要素であるので、まだ仏がいないが、まもなく仏の出現する世界に必要であると考えても不思議ではない。「親孝行」を最も尊いと考えれば、例えば「親子以外の人間関係」を大切にすべきであるという趣旨を構成に盛り込むのは、主旨を伝えるにくくなるため、ない方が良く考えたのだと思われる。一方で「武力」「盗み」「仙人の力」はどちらかと言うと古い時代の趣があり、まだ仏法が広まっていないために人々の知的水準が低い状態の天竺を描こうとすればそれらの要素が描かれるのは自然であるように思われる。「知力」や「財力」などは特に文明的な要素であるから、仏教の広まる前の、仏教が広まった後に比べるとまだ人々の知的水準が低いと思われる世界では、そのような要素は持て囃されてはいない方が、構成上都合がよかったように思われる。

〔注〕

- (一) 国東文磨『今昔物語集成立考(増補版)』(早稲田大学出版部 一九六二年)八九頁参照。
池上洵一『今昔物語集』の世界 中世のあけぼの』(筑摩書房 一九八三年)二五二頁参照。
小峯和明『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院 一九八五年)四五〇頁参照。
- (二) 池上洵一氏前掲書 二四四頁参照。
- (三) なお本論における『今昔物語集』の本文は全て新日本古典文学大系三三『今昔物語集 一』(今野達校注 岩波書店 一九九九年)に依り、引用の際は頁数を記した。
- (四) 国王が「奇異ノ事」と言ったのは、仙人の家の周りに水気がないのに、水草である蓮の花が咲いていることが珍しいと思われたからであろう。
- (五) 中村元他編『岩波仏教辞典 第二版 CD-ROM版』(岩波書店 二〇〇四年)の「末法」の項によれば「仏法が衰退するこの末法の時代は、吉蔵(きちぞう)の『法華玄論』10、正像義などによれば1万年とされ、その後、教えも完全に滅びる(法滅(ほうめつ))をむかえるとされる」と書かれていたので、これを参考にした。
- (六) 仏教の世界では釈迦が仏になる前に、過去仏という存在がいたと考えられており、例えば天竺部でも卷二の十一では釈迦が宝手比丘の前世を語る時「昔シ迦葉仏ノ涅槃ニ入給テ後」(一二三頁)と書いている。釈迦とそれ以前にこの世に出現した六仏を総称して「過去七仏」と言うが、「迦葉仏」はそのうちの第六仏であり、釈迦の直前に出世した仏であるとされている(新日本古典文学大系三三『今昔物語集 一』人名・諸尊名索引 四頁「迦葉仏」の項を参考にした)。このことから仏も釈迦が最初というわけではなく、仏教も釈

迦が生まれる前から存在したことになると言える。